

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第531号 平成25年4月19日

ハーモナイズ・アップ

環太平洋戦略的経済連携協定（TPP）の交渉参加に向けた日米の事前協議が最終決着し、米政府は日本の参加を支持すると表明しました。

安倍首相は「一日も早く参加し、交渉を主導していきたい」と意欲を示していますが、米側の事後手続きの関係で、日本の交渉への正式参加は早くても7月となる見込みです。

TPPへの参加については、産業界からは賛成の意見が示されていますが、農業関係団体は一貫して反対しています。このTPPに関しては、専門家といわれる人々の間でも賛否が大きく分かれていて、まさに国論を二分する大きな問題となっています。

ところで、肝心のTPPというのは何かという事ですが、

「Trans-Pacific-Partnership」の頭文字から取ったもので、アジア太平洋経済協力会議（APEC）の域内のヒトやモノ、サービス、投資を自由化しようという国際協定です。

現在、TPPの交渉に参加しているのは、アメリカやオーストラリア、シンガポール、チリ、カナダなど11か国に及んでおり、これに日本が参加する事になると、太平洋を挟んで一大経済圏が誕生する事になります。

TPPが成立し貿易が自由化されれば、工業製品については関税などの障壁が無くなり輸出がし易くなりますので、政府の試算では、TPPに参加した場合、日本全体で国内総生産（GDP）を3兆円以上増やすとしています。一方、農産物など、これまでも外国からの厳しい競争に晒されている分野では、関税などが撤廃されれば壊滅するとの危機感があり、実際、政府の試算でもTPP参加によって農林水産業の生産額は3兆円減るとされているのです。

このように、TPPへの参加は、メリットもあるでしょうが、大きな打撃を受ける分野もありますので、国民の1人としてどう考えるべきか判断の難しいところです。というより、このまま進んでしまう事に不安を感じてしまいます。この不安感には多分に漠然としたものですが、不安の元を辿っていくと、良く分からない事にあるとって良いでしょう。

TPPに関しては、政府からの情報提供や説明が十分とは思えません。これまで

の日本外交の脆弱さを見てきた国民からすれば、結局はアメリカに良い様にやられてしまうのではないかと、日本だけが一方的に損をするような結果に終わるのではないかと不安を、残念ながら払拭する事ができません。

勿論、経済がグローバル化している中で、日本は貿易立国として海外市場の活力を取り込む為にも、TPPへの参加が重要な課題である事は理解できます。ただ、それによってただでさえ自給で出来ていない日本の農業が壊滅する事になれば、地球的規模での食糧不足が想定される中、日本の将来は極めて危うい事になります。

日本の美しい国土は農林業の力で保全されて来ました。日本の農業の崩壊は、日本の国土の荒廃をも意味するといっても過言ではありません。TPP参加の前提は、日本の農業を、「守り」ではなくもっと強いものにしていくという視点に立って、具体的な手立てを早急に示す事だと思います。

また、我が国は国民の健康や環境を守る為に厳しい基準を設けていますが、アメリカからはこれが貿易上の障壁だとの主張がなされており、これも懸念材料の一つです。

食料品の安全基準や食品表示の基準は守られるのか。国民皆保険や医療制度が維持できるか否かは、国民の暮らしに直結する重大な問題です。

政府は国益を守るといいますが、その国益とは何を指すのでしょうか。少なくとも、国民の健康や安全、環境を守ってこそその国益だと思います。

この点について、日本はデンマークから学ぶべき事は多いと思います。

それは、1980年代半ば、当時の欧州共同体（EC）が域内市場統合、すなわち貿易自由化を進める際、デンマークは、締結にむけた交渉に遅れて入ったにもかかわらず、交渉入りの際に「ハーモナイズ・アップ（Harmonize Up）」という原則を掲げ、加盟国に認めさせたというものです。

この「ハーモナイズ・アップ」というのは、域内貿易自由化とある国の規制が衝突したとき、環境や安全等に関わる上質な規制に関しては、その上質な規制に合わせ、上方に調和化させようというものです。

例えば、食品の安全に関する基準が他国と比較して厳しくても、それが自国民の健康を守る上で良質な基準であれば、その基準は他の国民にとっても良質の基準となる筈です。また、日本国内の産業界は、その厳しい規制や基準をクリアして来ていますから、その厳しい規制や基準を他国が受け入れれば、日本の企業の競争力は更に強化される事にもなります。

TPPの交渉に遅れて参加する日本は不利な立場に置かれているといわれていますが、デンマークのしたたかな交渉術に習い、将来に禍根を残さぬよう、国益の確保に努めて欲しいと思います。（塾頭：吉田 洋一）